

真 田 組 み 唄

真田組むのは長者の暮らし 夏は木の陰 冬は火燵こたつ
真田組んでも 養いまする どうか私をふらぬよ様に
真田組んでも 夫婦みょうとぐち口や食える 主が剣取りや うちが組む
組子組子と見下げてくれな 組子は此の世の米とびつ
組子組子と 軽蔑おしな 学校がっこう先生にや負けはせぬ
話しゃご免なされよ 歌ならお出で 歌は仕事のまぎれぐさ
真田組むときゃ わき目をするな 組んだ真田が ペケになる
朝あの疾とうから 弁当箱下げて おかんい行て来る 稗わらよりに
真田ひょうたん組や 組子のわざ業わざじゃ 染しみみのあるのは 選よりの業
何が何でも 私うちや井の内の いざり棕の木の下が良い
神戸を出るときゃ涙で出たが 今は 神戸の風もいや
切って置いたに あの蓮根が 卑怯ひきょうみれん未練の糸を引く
ほれて居れども まだどこやらが 雪の降る性せいか 肌寒むや
向こうの山見りゃ いにとてならん 小松林を親と見て
朝はのらのら 昼ゆるゆると 晩にせり込む 野良のくせ
門かどへ立つまにゃ お入りなされ 門は寒かる 冷たかる
讃岐三角 丸亀やまるい さぞや高松 高うござろう
ほれた病がお金なおで治りゃ 八百屋お七は 殺しゃせぬ
山で床取りゃ木の根が枕 落ちる木の葉が夜着となる
何をくよくよ川端柳 水の流れを見て暮す
此所ここは職工場じゃ 遊び人いらぬ いんでおくれよ 邪魔じゃまになる
組子組子と そやしなさるな いぬりゃ ところの花娘
わたしゃ此の社の はきだめおなご おだてなさるな ごみが立つ
真田組み組み 主さんのことを 思い出します わらの数